

感想

こどもはきっかけ。
結局は、大人がどうしたいか「生き方探求」かもしれない。



岡田喜美子 さん

左京区在住
わっかの会 主催



なぜかよく綾部という名を聞くようになった、特に志賀郷っておもしろいよとも。なぜ綾部が熱いのか、行って実感できた。

綾部の市街地から車で25分程度のところにある志賀郷地区は10集落あり、市内でも過疎・高齢化が深刻な地区。

地区の小学生の総数は60名あまりで、地区の全人口1,500人のわずか4パーセント。しかし、他所からの移住者も多く、若い人が1ターンで住んでいる。そんな志賀郷地区の空き家に、子供や、将来子供のいる世帯の定住を手助けして、地域に子供の声をとりもどそうという取り組みをしているコ宝ネットがある。コは古民家、子供達、コミュニケーション、コーポレーションの意味。

また、半農半Xという言葉で有名な塩見直紀さんが綾部市の他の地区にいらっしゃる。半農半Xとは小さな農と天職Xを生かした生き方で、塩見さんが1995年ころから暮らし方として「半農半X」というコンセプトを提唱している。塩見さんは他の人の天性Xを探求するお手伝いをしていて、そんな彼がいるから半農半X的な生活を志す若者が集まってくる。綾部市は、志賀郷は逸材の宝庫である。

できる範囲で食の自立をめざし必要なだけの現金を自分の天職でかせぐ。なんとも理想的な生き方だ。現実問題、天職でかせぐことの難しさもあるようだが、みんなきらきらしていた。

志賀郷のコ宝ネットの代表、井上吉夫さんは町を元気にするのに必要なのは大きな施設ではなく、人が集まり、活気がないとだめだと語る。そんな人がいるからこれだけ志賀郷は生きることを楽しむ人たちが集まり、盛り上がっているのだろう。



イベントをとおして世代の違う、立場の違う人たちが助け合いながら、支え合いながら生活している様子を見ることができた。そんな大人を見て育った子どもにも他人を気遣う、分け与えることが身に付いている様子も見られた。まちと田舎の人々の距離の近さ、生活環境の違いが子どもにどんな影響があるのかが少し見えた。

まちではものがあふれた環境の中で育っている子どもに他人に分け与えるということを教える難しさを感じていた。まちでの人との距離が遠い環境の中で人々が支え合わないと生きていけないということを教えるということが難しいとも感じる。

どっちがいい悪いという話ではない、きっとどちらも経験することが大切。だからこそまちと田舎の交流はただ楽しいだけではなく、とっても重要な要素があるように思われる。

子どもたちは親だけではなくいろんな大人と関わり、社会とつながり、いろんなことを経験していく。輝いた大人たちに囲まれて育て欲しいし、自分もそんな人でいたい。

田舎暮らしをするのか？綾部に移住するのか？といった簡単な答え探しではなかった。どのように子どもを育てていくのか。自分がどうやって生きていきたいのか。自分と向き合った貴重な経験だった。

